



高大連携が拓く地域の未来： デジタルアーカイブを活用した 課題探究型学習の実践

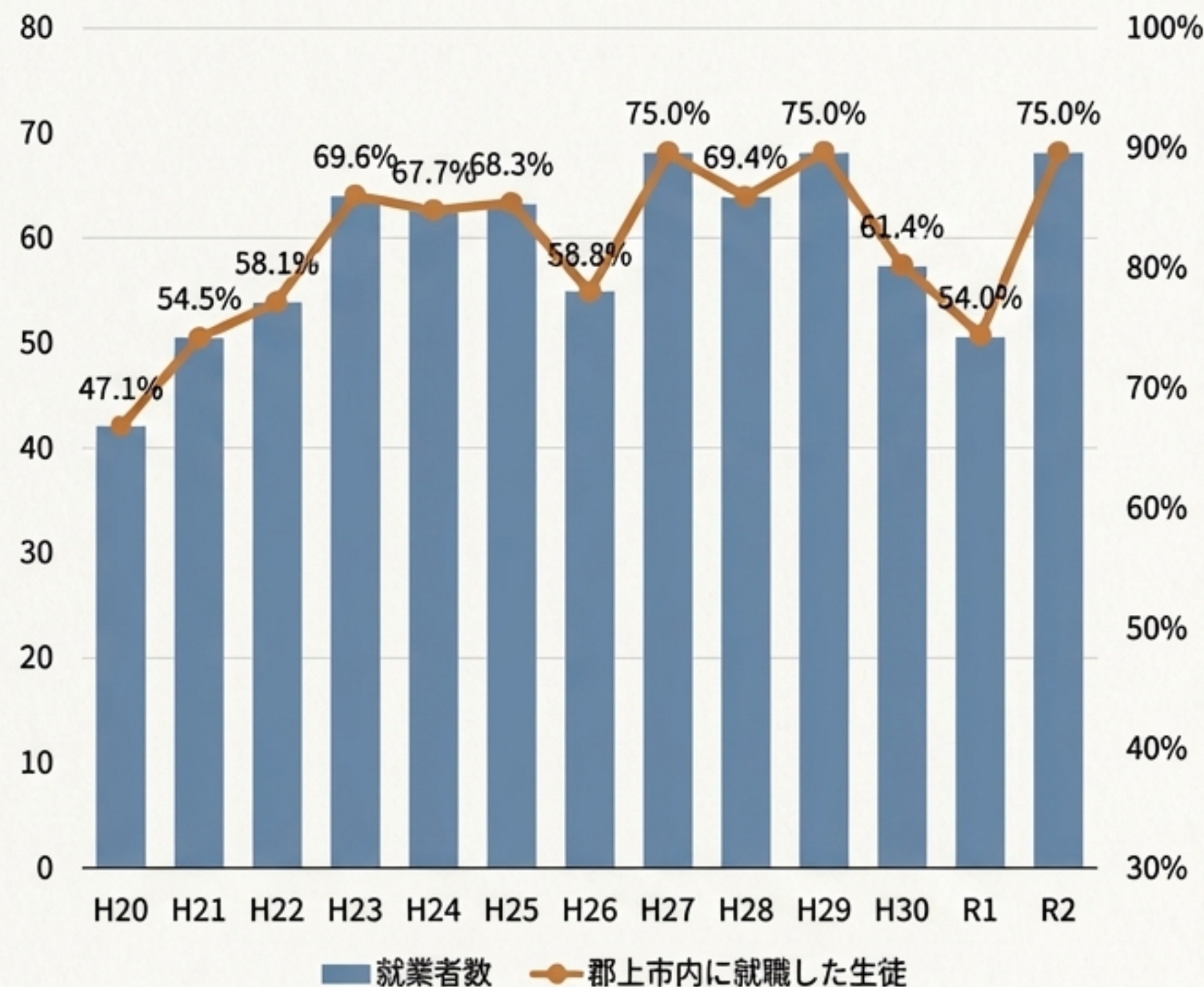
岐阜女子大学とG高等学校による
「知的創造サイクル」の実践事例

人材の流出と伝統の継承：中山間地域が直面する共通の課題

岐阜県の重点課題：地域資源の活用、観光振興、そしてそれを担う人材の育成。

歴史的な課題：大学の研究と地域の真のニーズとの間にあった連携の不足。

G高等学校の使命：地域への愛着を育み、若者の地元定着を促すこと。平成27年度以降、生徒の市内就職率が増加傾向にあり、地域連携活動の成果が示唆される。



「知の拠点」を目指して：岐阜女子大学の地域資源デジタルアーカイブ構想



文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」に採択されたプロジェクト。

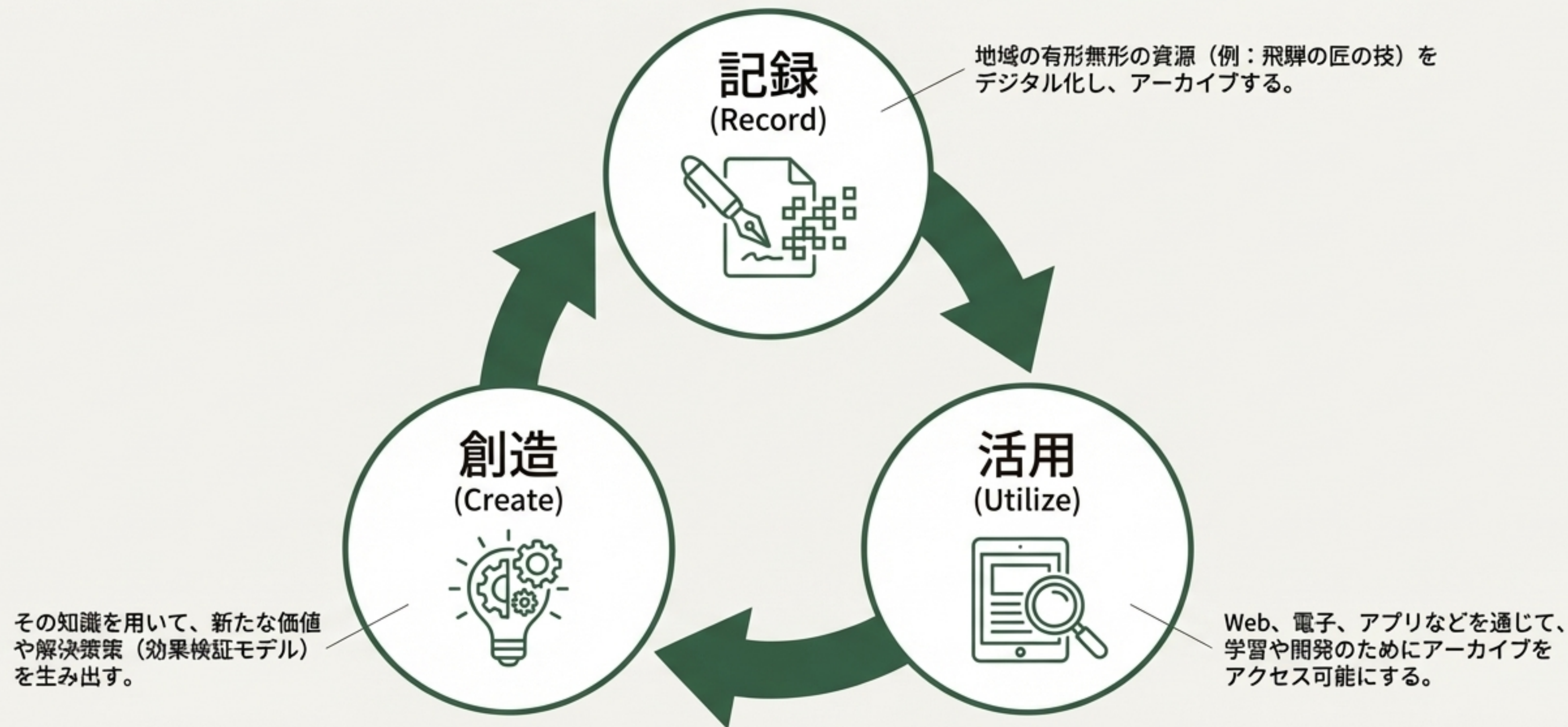
ミッション (Mission) :

地域資源を保存・活用し、地域課題を解決する「知の拠点」を形成。伝統文化産業の振興と新たな観光資源の発掘を目指す。

規模 (Scale) : 3年間で15万件の地域資料をデジタルアーカイブ化。

記録から、活用へ。そして新たな価値の創造へ。

岐阜女子大学-子大学が開発した独自のフレームワーク「知的創造サイクル」を解説。



探究のフィールドは「地域」そのもの。高大連携による課題解決学習が始動



G高等学校の紹介:中山間地域に位置する小規模校。
国公立大学進学希望者から就職希望者まで、多様な進路の生徒が在籍。

教育目標:将来、郡上市に貢献できる人材を育成する。

新カリキュラム:「地域探究」など、地域をテーマにした探究科目を開講し、
「社会に開かれた教育課程」の充実を目指す。

コロナ禍という逆境が生んだ、生徒主体のプロジェクト

当初の計画

郡上市内の製造業や建設業で就労実習を行う予定だった。



コロナによる中断

感染症対策のため、8月まで校外実習が自粛に。

生徒からの提案

「コロナ禍で遠出が難しい今だからこそ、地域の観光地を調べて郡上市民に知ってもらいたい。」

この主体的な意見から、観光冊子の制作が決定。

大学生の知見とデジタルアーカイブを武器に、高校生が観光冊子を制作



制作物（The Product）

観光冊子「郡上探訪 郡上であそぼ」を作成。

連携の仕組み（How the Collaboration Worked）



岐阜女子大学がZoomを通じてオンラインで指導、冊子の作成フォームを提供。



生徒は、冊子に掲載しきれない情報を補うため、大学のデジタルアーカイブを活用。冊子にQRコードを掲載し、アーカイブの詳細情報へ誘導。

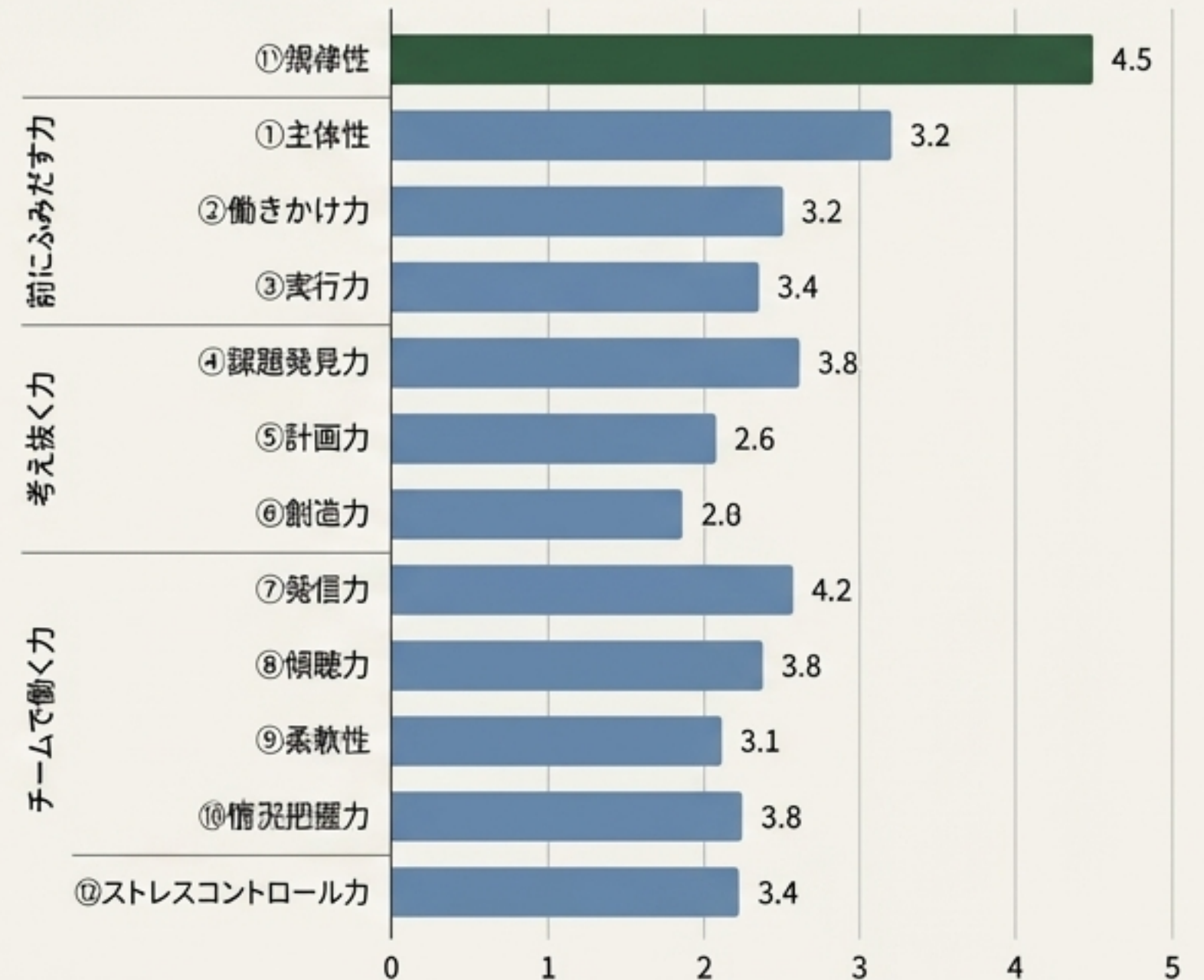
指示には従える。しかし、自ら踏み出すことには自信がない。

評価の枠組み（Assessment Framework）：経済産業省の「社会人基礎力」を基に、3つの能力（前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力）と12の能力要素で評価。

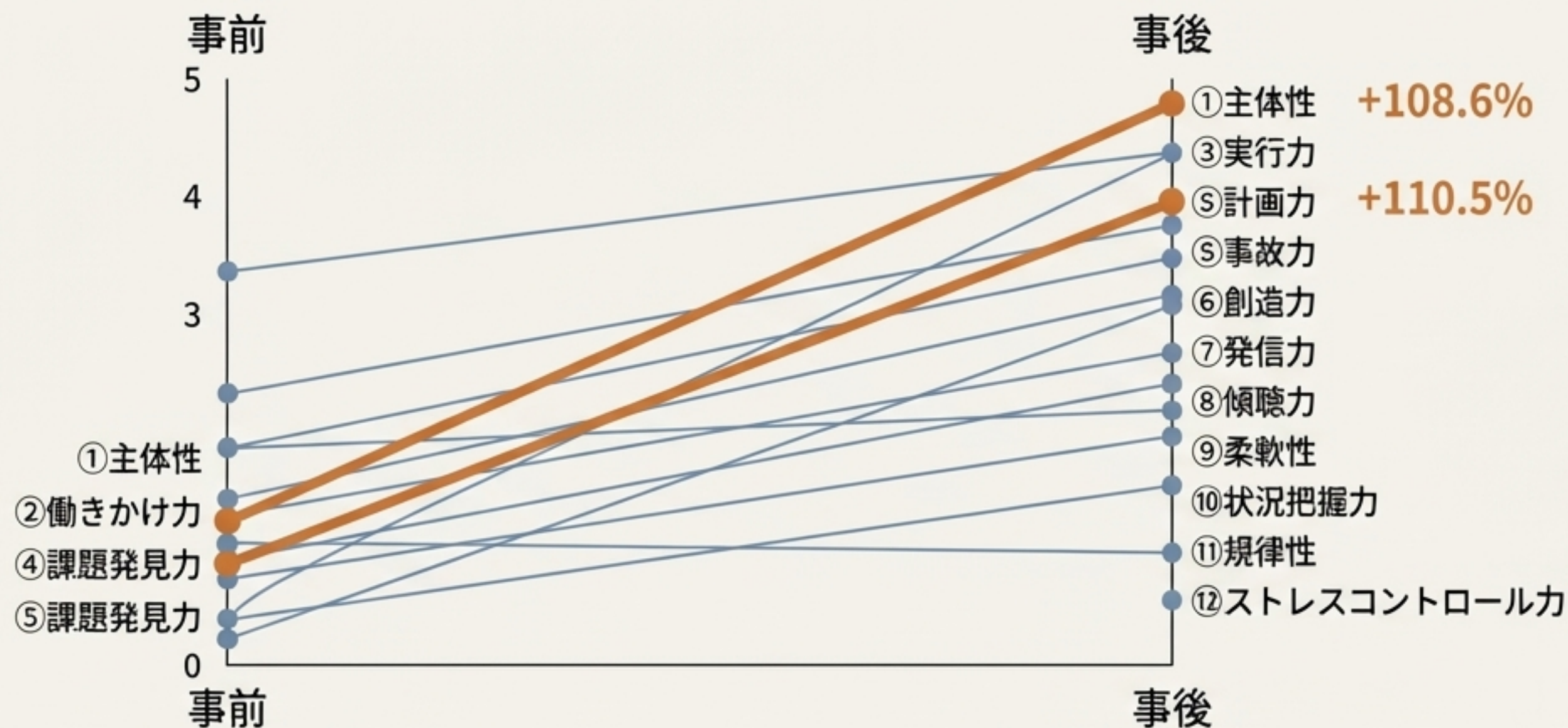
事前アンケートの主な結果（Key Finding from Pre-Project Survey）：生徒の自己評価は「⑪規律性」（Discipline）で高い一方、「前にふみだす力」（Action）と「考え抜く力」（Thinking）に属する能力要素（例：「①主体性」）で低い傾向。

考察（Inference）：教員の指示には行動できるが、自ら考えて行動することは苦手な集団であると推察された。

事前アンケート結果：12の能力要素別自己評価



データが示す生徒たちの変容：「前にふみだす力」と「考え抜く力」の飛躍



事後アンケートの結果 (Post-Project Survey Results)：12の能力要素すべてで数値が上昇。
最も顕著な成長 (The Most Significant Growth)：事前に課題であった「前にふみだす力」（主体性+108.6%,
働きかけ力+110.5%）と「考え抜く力」（課題発見力+109.8%）の数値が大きく伸びた。
結論 (Conclusion)：本実践は、生徒が主体的に行動する力を実感できるまで伸長させることに寄与した。

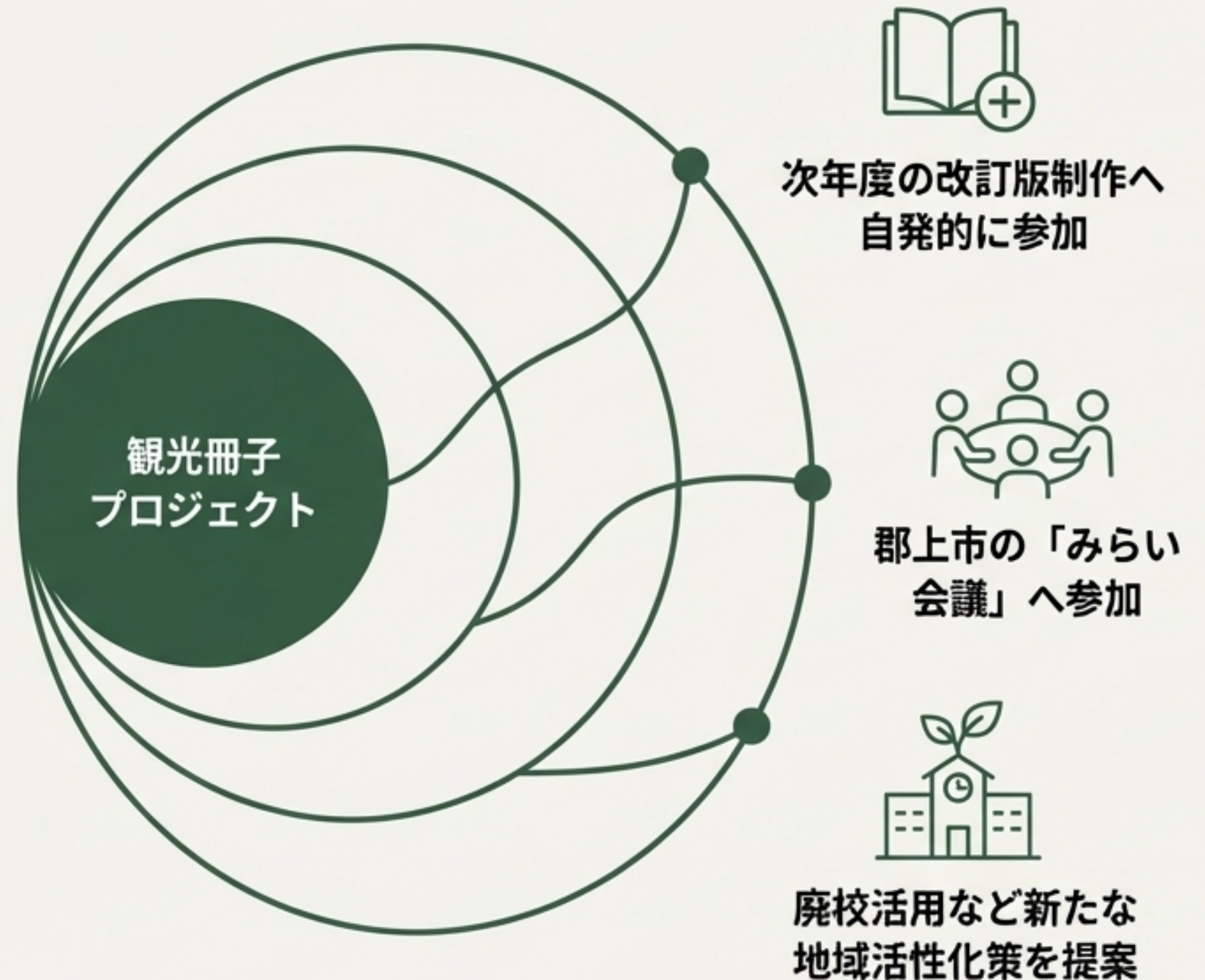
自信が行動を変える。生徒たちが地域の「当事者」になった瞬間

自信と自己肯定感の向上（Boost in Confidence and Self-Efficacy）：

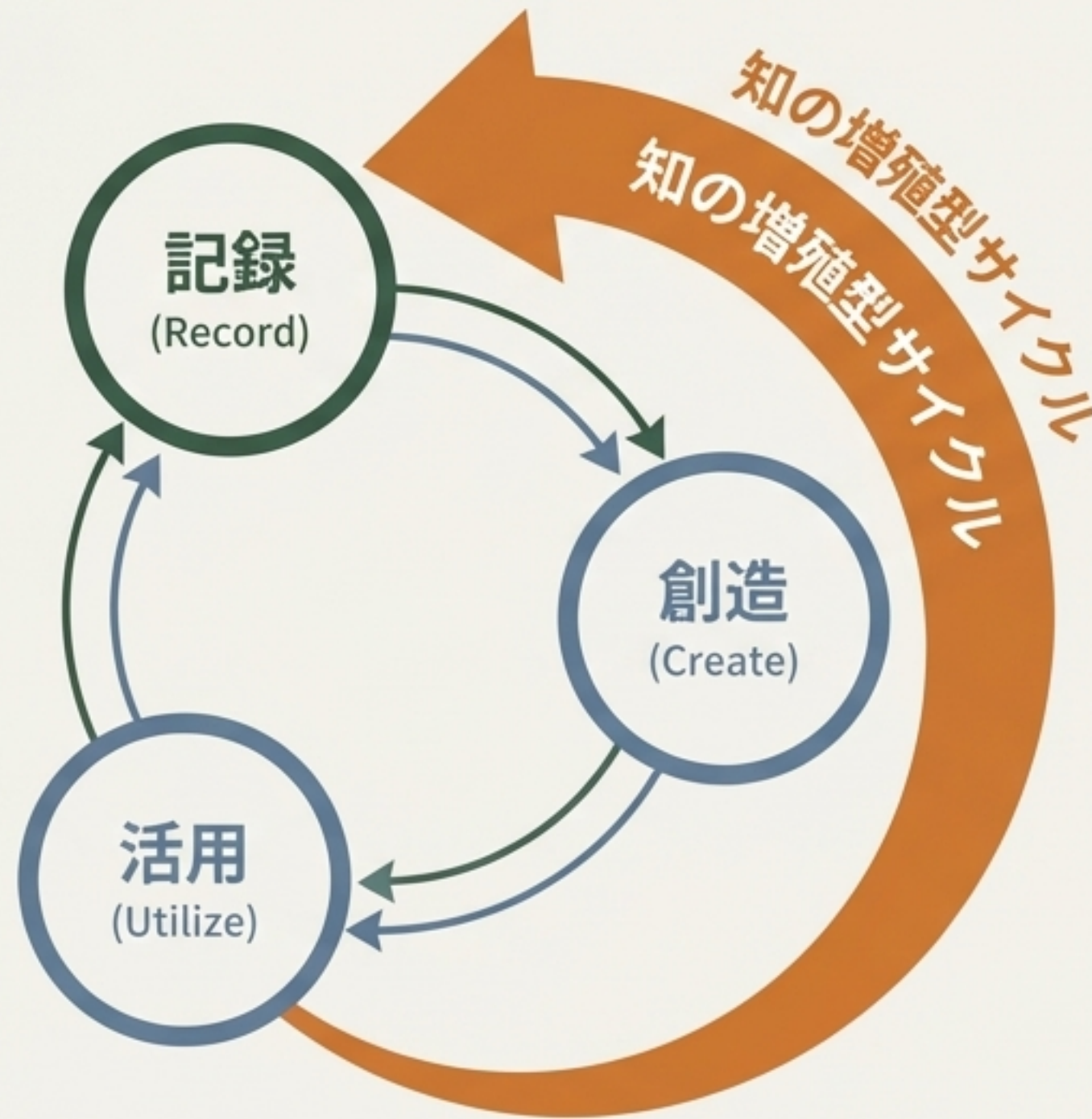
冊子が形になり地域で目にすることが、生徒の大きな自信につながった。

行動変容の連鎖（Chain Reaction of Behavioral Change）：

1. 次年度の改訂版制作へ自発的に参加
2. 郡上市の「みらい会議」へ参加
3. 廃校活用など新たな地域活性化策を提案



「知的創造サイクル」から「知の増殖型サイクル」へ



この実践は、単にアーカイブを「活用」しただけではなかった。

生徒たちが収集・記録した地域資源や、制作した観光冊子 そのものが、大学の地域資源デジタルアーカイブに新たに追加・蓄積された。

これにより、地域と学生が共有知を継続的に豊かにしていく、自己増殖的なサイクルが実現した。

この実践を、他の中山間地域、 そして全国の探究学習へ

再現可能なモデル（A Replicable Model）：
この高大連携は、他の地域でも応用可能な強力な
モデルとなる。

カリキュラムとの連携（Curriculum Connection）：
「総合的な探究の時間」を、現実の地域課題と結び
つける具体的な方法を示す。

三方よしの効果（A Three-Way Win）：
生徒の能力を伸ばし、地域への愛着を育み、
そして地域社会に具体的な価値を創造する。



「学校は、地域の『知の拠点』になれる」



- 教員の役割 地域課題の提携、学校の知識を集約して、独自の「地域資源デジタルアーカイブ」を地域の課題を主体的に抽出し、学校の知識を集約して、独自の「地域資源デジタルアーカイブ」
- 学校図書館の可能性
学校図書館が、総合的なデジタルアーカイブの拠点となり、学校のアイデンティティを確立する。
- 協働の重要性
学生、地域住民、大学との協働が、地域のポテンシャルを最大限に引き出す鍵となる。

本実践の要点：地域課題から生徒のエンパワメント、そして知の増殖へ

1



戦略的基盤 (Strategic Foundation)：

大学主導のデジタルアーカイブは、地域活性化の強力なエンジンとなり得る。

2



人間中心のインパクト (Human-Centered Impact)：

協働的な課題探究型学習は、生徒の主体性や課題発見力を飛躍的に向上させる。

3



持続可能なシステム (Sustainable System)：

教育活動が地域共有の知識を永続的に豊かにする「知の増殖型サイクル」を構築できる。

参考文献 (References)：

久世均，熊崎孝之著：地域資源デジタルアーカイブによる地域活性化の研究，岐阜女子大学，デジタルアーカイブ研究報告，2020 Vol.3，PP25-30



ご清聴ありがとうございました